

利便性とうるおいが  
両立するまち  
③

# 余暇活動の多彩さと利便性

## 日常余暇圏と時々余暇圏

### 市民の余暇活動と 利用する施設への所要時間

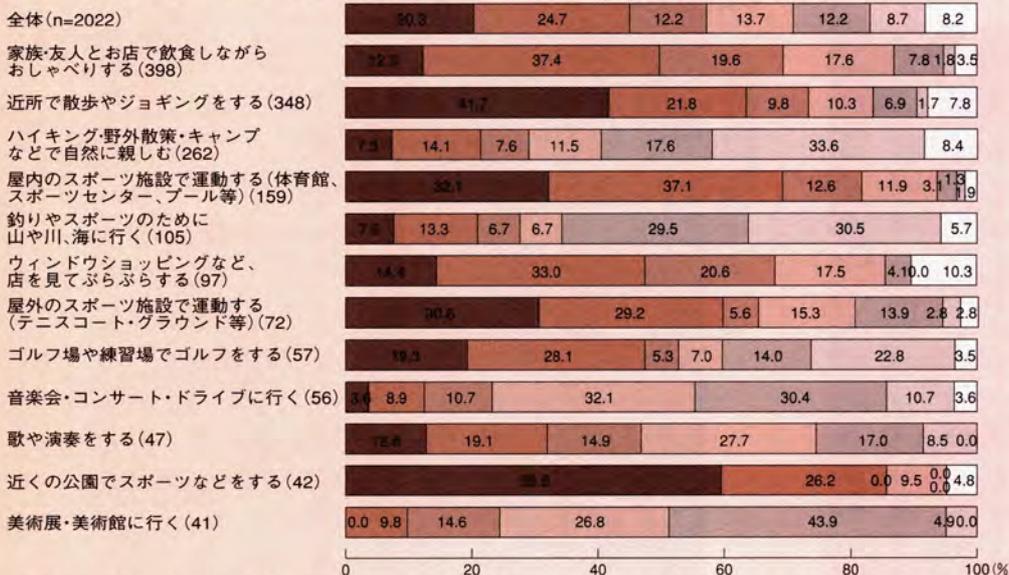
市民の余暇活動はさまざまであるが、趣味・余暇活動の場所への移動にかかる時間をみると、目的ごとにかなりはつきりとした傾向がみられる。「近所で散歩やジョギング」は15分未満が4割と多く、「近くの公園でスポーツなどをする」もやはり15分未満が6割となっている。「屋内のスポーツ施設で運動」は30分以内までが7割、「屋外のスポーツ施設で運動」はやはり30分以内までが6割となっている。一方、「ハイキング・野外散策・キャンプなどで自然に親しむ」は1時間30分以上が3割以上となっている。

また、子ども、主婦、高齢者などは、徒歩や自転車で日常的に気軽に出かけることが多く、若者は、週末に遠くの施設まで出かけて活動することが多い。

つまり、余暇活動は、15分圏程度の身近な施設を利用する日常の活動と、時々、時間をかけて遠くまで出かける活動とに分けて考える必要がある。

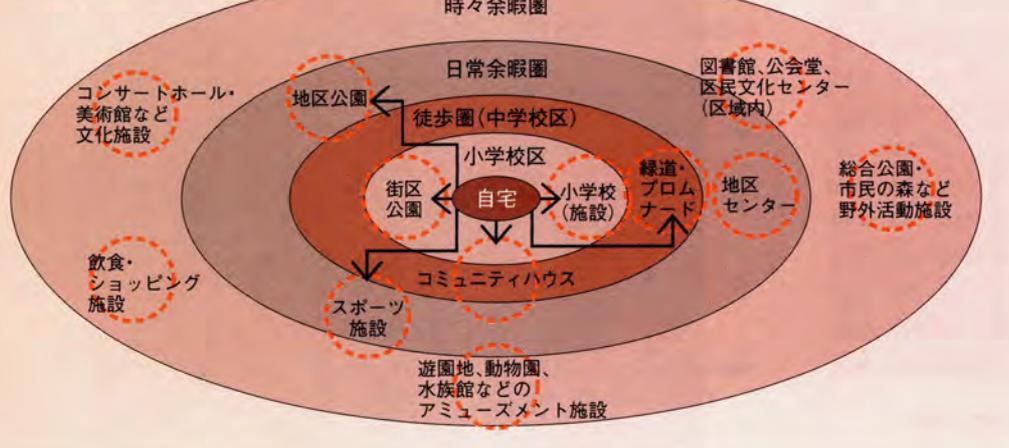
ここでは、仮に、日常的に身近なところで活動するエリアを「日常余暇圏」とし、休日に電車やバス、車を利用して半日程度過ごすエリアを「時々余暇圏」として利用できる施設の分布を中心にみていくこととする。

●特に大切にしている趣味・余暇活動の場所への所要時間



市民の余暇活動で多いのは、「ウィンドウ・ショッピングなど店を見てぶらぶらする」「家族・友人とお店で飲食しながらおしゃべりする」「近所で散歩やジョギングをする」「ハイキング・野外キャンプなど自然に親しむ」「映画館に行く」「美術展・美術館へ行く」などの活動である。飲食・ショッピング系は、横浜都心、ハイキング・自然系は横浜市以外の県内、文化系は東京都内へ行く市民も多い。(P22参照 資料：「市民生活行動調査」平成12年)。

### ●日常余暇圏と時々余暇圏



## 日常余暇圏の種類と利便性

日常余暇圏をとりあえず徒歩15分程度の範囲と考え、中学校区程度のエリアと想定すると、利用する公的施設としては街区公園、近隣、地区公園や屋内・屋外のスポーツ施設、緑道やプロムナード、集会所施設では地区センター、コミュニティハウスなどがあげられる。これらの身近な施設の中学校区ごとの分布をみると、施設数16〜30の中学校区が47%、31〜45が32%である。また、施設の種類の1中学校区に3〜4種類が平均的である。

横浜市では、昭和48年以来、市民が集会所や文化活動、スポーツ・レクリエーション活動など多目的に利用できる市民利用施設として地区センターの建設を進めてきた。平成12年度で69館の整備が終わり計画目標の86%の達成率となり、利用者は年間約640万人に上っている。

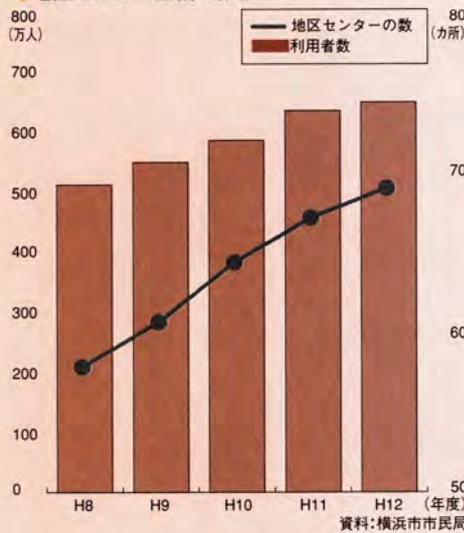
また、街区公園、近隣公園、地区公園などの市民に身近な公園も整備の水準をあげ、平成12年3月現在798haで都市計画区域に占めるこれら住区基幹公園の面積の割合は、1・84%で高い水準となっている。

今後、地区センター、コミュニティハウス、公園など地域の市民利用施設は、既存のストックを活用していか地域の特長やニーズに対応した使いやすい施設にしていくかが課題となるだろう。

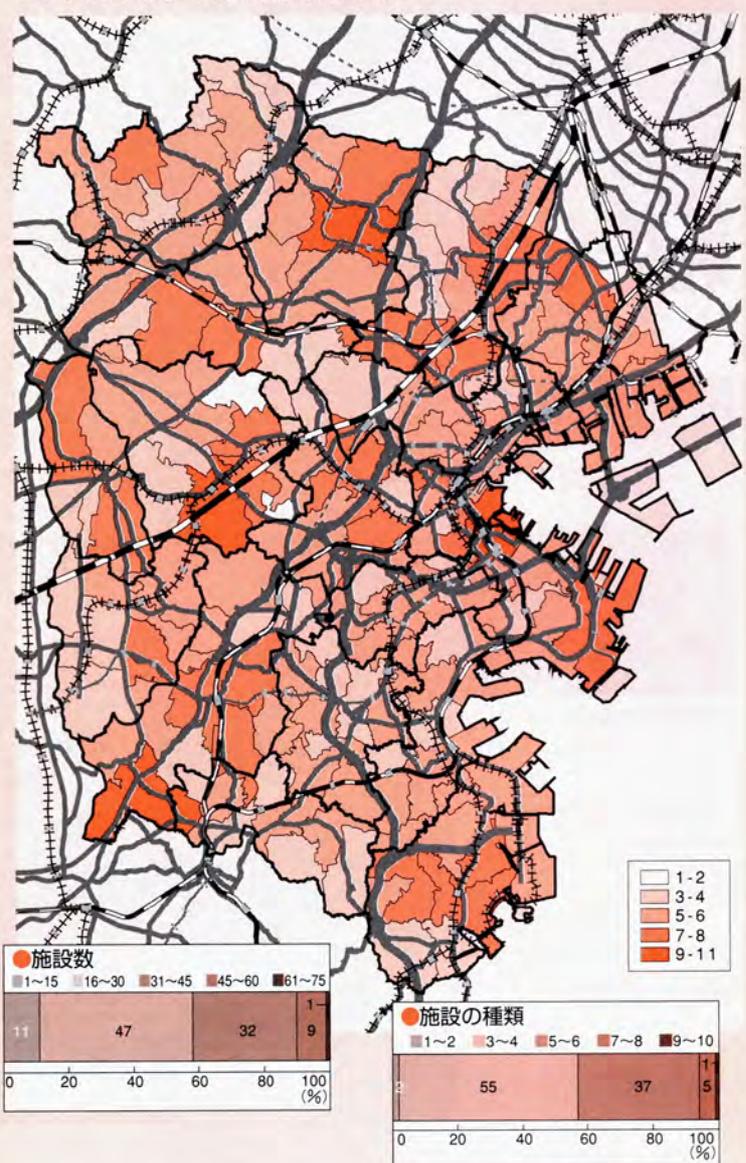
## 時々余暇圏の種類と利便性

休日に電車やバス、車を利用して半日程度過ごせる時々余暇圏を設定すると、その資源としては、総合公園・市民の森などの野外活動施設、コンサートホール・美術館など文化施設、遊園地・動物園・水族館などのアミューズメント施設、飲食・ショッピング施設などが考

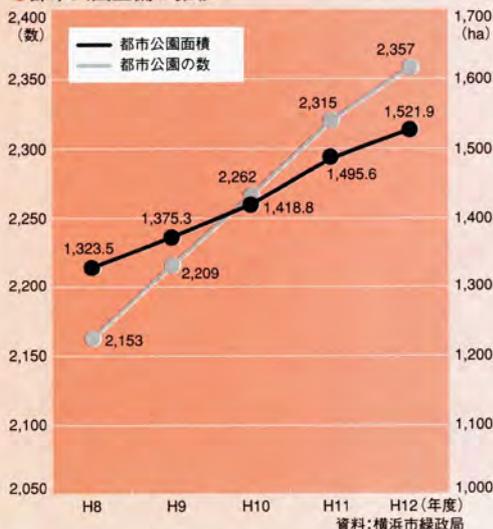
●地区センター整備の推移



●中学校区域別・日常利用資源の多彩さ



●都市公園整備の推移



えられる。これらの施設の分布をみると、市内の鉄道駅から1km圏（徒歩15分圏）の中に自然系の施設を含めて52%と約半分が分布している。

横浜では、鉄道の延伸や幹線道路の整備による市内移動の利便性の向上により、ショッピング・飲食や買い物などの楽しみ、コンサート・美術館などの文化活動、市民の森や緑地での自然とふれあう活動、市民体験農園での活動など、多彩な余暇活動の施設へのアクセスが改善され、「暮らしやすいまち」のインフラが整いつつあるといえる。

また、2002年ワールドカップサッカー大会の決勝戦の会場となる横浜国際総合競技場は、新横浜駅から15分の距離という利便性のよさもあり、世界のトップレベルの各種競技や多くのビックイベントの会場になり、集客力を高めている。

さらに、動物の生息地を再現した新しい展示手法の動物園「ズーラシア」は、平成12年度の利用者が130万人を超え、市民に新たな楽しみの場をもたらすとともに環境教育の場としても活用されている。国際性、専門性の高いこれら大型アミューズメント施設の存在は、市民生活にうるおいと楽しさを提供すると同時に、横浜の都市イメージを高めているともいえる。

### 多彩性と利便性をもたらす 余暇活動の指標

余暇活動の豊かさの指標を、その多彩性と利便性をもたらす施設の水準がどのようなレベルにあるのかであらわしてみた。当然のことながら、横浜には、市民が日常的に利用している多くの民間施設が存在している。市内の民間の施設と公的施設も含めて、飲食・ショッピング系、文化系、スポーツ系、自然系の資源の密度や施設数

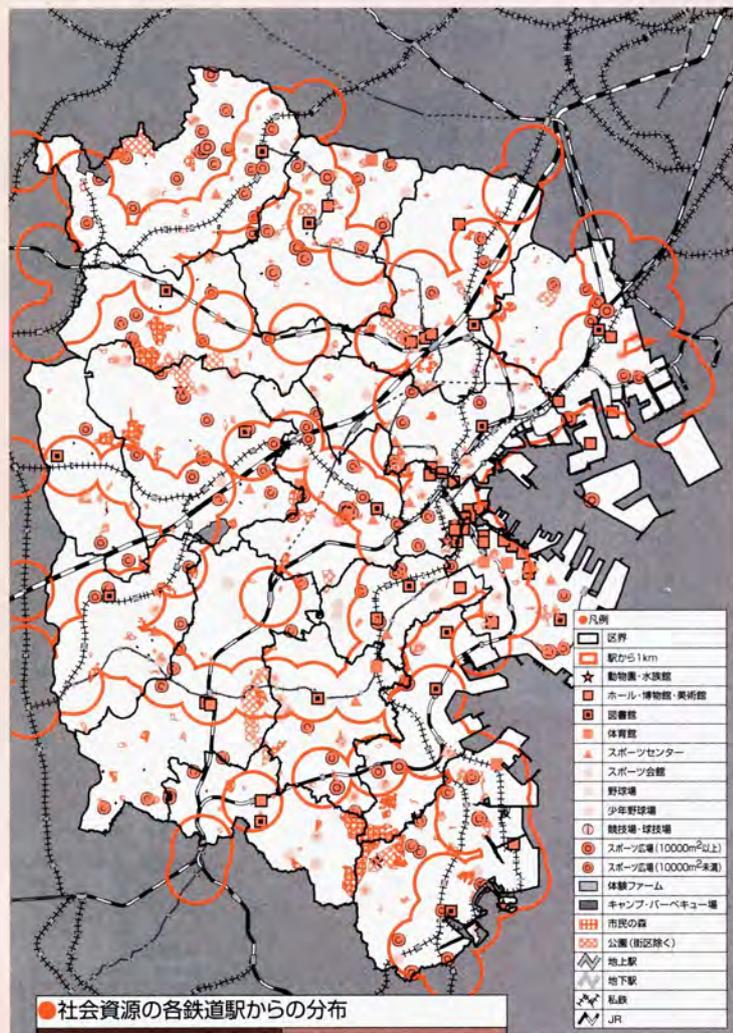


インドゾウのふるさとを再現したズーラシア

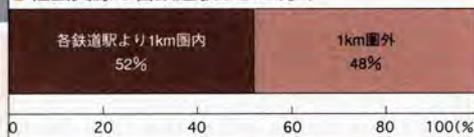


横浜国際総合競技場でのコンサート

●社会資源の分布（駅から1.0km圏）



●社会資源の各鉄道駅からの分布



を他都市と比較してみた。飲食・ショッピング系では、食堂・レストランの密度は平均をわずかに下回っている。3000㎡以上の百貨店や1500㎡以上のスーパーなど大型店は122店で東京都部の214店について多く、その密度も大阪、東京について第3位である。また、映画館・劇場などの娯楽施設の密度は、平均をわずかに下回っている。

文化系は、学習塾からフィットネスクラブまでさまざまな習い事の個人教授所（約3000カ所）の密度と、市民一人あたりの図書館の貸し出し冊数、博物館数で比較した。

その結果、個人教授所は平均を上回っている。図書館貸し出し冊数は低い値となっているが（大都市比較統計年表）、市内の地区センターの図書コーナーや学校開放されている市民図書室の利用状況など図書館以外の貸し出し冊数を加算すると、一人あたり3・85冊でやや平均を上回る数字となる。

スポーツ系については、公立の体育館、陸上競技場、野球場の立地密度を比較した結果、大都市の中では平均を下回る。ただし、横浜市では、区に1館のスポーツセンター、地区センターの体育室、小学校のグラウンドが開放されており、これらを含めた他都市との比較は難しい。

公園や緑地についてみると、都市公園の都市計画区域面積に占める割合は、大都市平均を上回り、また、法的に担保された緑地は若干下回る結果となった。

横浜市では、これら既存のストックの活用の中で、各市民利用施設については、開館日の拡大により、市民利用の充実が図られている。また、いつでも気軽にスポーツ・レクリエーションを楽しめるまちを目ざして施設の整備や市民の活動を支援するなどの環境づくりに取り組んでいる。

### ●余暇活動の多彩さと利便性の指標

